

ÉTUDES  
DE  
LANGUE ET LITTÉRATURE  
FRANÇAISES

フランス語フランス文学研究

N° 73

日本フランス語フランス文学会

Société Japonaise  
de  
Langue et Littérature Françaises

---

Librairie HAKUSUISHA  
Tokyo, Japon

1998

フランス語表現の基盤にある  
Parole 構造について

三石博行 / Eddy VANDROM

1. Modalités, Relations logiques, Discours explicatif の組み合わせとしての Langue の構造

フランス語表現は、Modalités, Relations logiques, Discours explicatif の 3 つの要素によって構成されている。ここで定義する Modalités とは話し手の主観性を表現する方法で、Relations logiques は文の論理的関係を表現する用法で、Discours explicatif は論理的な文脈の展開を助ける表現である。Modalités を構成する要素は主に 4 つあり、それを細分すると 41 種類の表現方法が考えられ、Relations logiques は 14 の論理的表現要素に分けられ、それらを細分すると 44 の表現方法があり、Discours explicatif は 3 つの要素に分けられ、17 の表現方法によって構成されている。これらの組み合わせによってフランス語表現の Langue 構造が構成されている。

2. 作用、質、空間、時間と量の実存形態からなる Parole の発生的構造

以上の要素をもって構成されるフランス語表現方法の基礎に Existence の構造を仮定した。ここで定義した Existence とはソシュールによって Parole として語られるものであり、主体の精神構造とも言える。言語過程の最も基本的な要素として表現作用要素があり、それは表現しようとする欲望の「肯定」と「否定」

の要素に分けられる。その後、言語過程は表現機能要素に進化していく。質的要素とし快感原則に即して肯定的なものは「自己」に否定的なものは「非自己」に分かれ、そして空間的要素として自己的なものが「ここ」として、非自己的なものが「ここでない」ものとして生み出され、同時に質的要素は肯定的なものが「全て」と否定的なものが「何もない」と言う二元論的な量的要素に分かれ、さらにそこから「ゼロ」「一」と「複数」の自然数的量的要素が発生する。また、空間的要素は快感原則によって肯定的なものは「今」と否定的なものは「今でない」の二元論的な時間要素に分かれ、さらに「今」と「未来」、「過去」の意識的な時間要素が発生する。ちょうど個体発生が系統発生を繰り返すように、主体が Langue を構成しようとする度ごとに、この Parole の発生過程は言語化の過程で繰り返されると仮定される。このモデルを Parole の発生的構造モデルと呼ぶことにする。それはフランス語表現の Langue 構造化の基盤を構築している。

3. 今後の研究の課題と問題提起

フランス語表現方法の研究は、日仏翻訳の機能を高めるために計画されたものであった。その中で Langue と Parole のモデルが仮定された。これらのモデルを今後検討するためには発生言語心理学、言語の起源に関する文化人類学や意味論についての比較言語学との共同研究が必要とされる。

(金蘭短期大学) / (大阪大学)

“l’Orient” dans l’œuvre de Pierre Roti Peter TURBERFIELD (101) ドレフュス事件とアンナ・ド・ノアイユ 白土康代 (102) アヌイの戯曲における自由あるいはユートピアについて 高瀬智子 (103) ミシェル・トゥルニエ『フライデーあるいは太平洋の冥界』における聖なるもののイメージ 宮里厚子 (104) Poésie années 90 : Olivier Cadot — *Futur, ancien, fugitif* Agnès DISSON (105) 日本人学習者の仏語鼻母音間の聞き分け 竹内京子 / 仏語鼻母音の現状と傾向 菊地歌子 (106) 副詞 *pourtant* について 野崎直人 (107) フランス語表現の基盤にある *Parole* 構造について 三石博行, Eddy VANDROM (108) アルベール・カミュ『異邦人』分析 粟国 孝 (109)

---

この学会誌は文部省科学研究費補助金(研究成果公開促進費)により出版するものであります。ここに厚くお礼申し上げます。

---

制作担当 日本フランス語フランス文学会事務局  
© 日本フランス語フランス文学会, 1998.